

農林水産省大臣官房長賞

『給食の向こう側』

埼玉県さいたま市立宮原小学校 四年二組 女子 清水 綾珠

私は、去年まで何も考えずに毎日給食を食べていました。時には好ききらいをして残したりもしていました。でも、あることをきっかけに、今では毎日感謝しながら残さず食べるようになりました。

新型コロナウイルスが流行し、二〇二〇年三月から数か月間、小学校が休校になりました。その期間中に、農林水産省の方が牛の着ぐるみを着て「いつもより牛乳やヨーグルトを一本多く買ってほしい」とうったえる動画を見ました。学校給食がなくなり、牛乳の消費量がへってしまったというのです。「牛は毎日お乳をしぼらないと病気になってしまう。だから毎日しぼらなければならない。このままでは、しぼった牛乳を捨てたり、牛の数をへらしたりしなくてはならなくなる。」というようなことを言っていました。

私はとてもしよげきを受けました。「牛乳を飲まなければ牛が殺されるかもしれない」と、毎日家でたくさん牛乳を飲みました。でも、飲んでいるうちに、「困っているのは牛だけではないかもしれない」ということに気が付きました。

(もしかしたら、野菜も余ってしまったって、農家の人も困っているかもしれない。給食を運ぶ人も、仕事がへったかもしれない。給食を作る人も、働けなくなったかもしれない。)

私たちの給食を作るために、たくさんの方が関わってくれているということに、初めて気が付いたので。こん立を考える人、調理をする人、材料を作る人、食器を作る人、材料を運ぶ人：直せつ関わる人だけでもたくさんいます。でも、その向こう側にも、たくさんの方がいます。例えば牛乳の向こう側には、牛を育てる人、牛のえさを作る人、牛乳の検査をする人、牛乳をパックにつめる人、牛乳パック用の紙を作る人、パックのデザインを考える人、それをパックに印刷する人、そのインクを作る人、ストローを作る人、牛乳を冷やす冷ぞう庫を作る人、その部品を作る人：本当に数え切れません。たくさんの方のおかげで私は給食を食べることができています。

私は牛乳を飲みながら、もう一つ大切なことに気がつきました。それは、たくさんの方の命を頂いているということです。「牛乳を飲まなければ牛が殺されてしまう」とたくさん牛乳を飲みながらも、おかずでは牛肉を食べていました。同じ牛の命です。本当は殺したくない、大切な命です。

休校期間が終わり、初めての給食の時、私は前とは全くちがう気持ちで給食を食べました。給食の向こう側にいるたくさんの方たちや命について考えながら食べるようになりました。これからも、感謝の気持ちを忘れず、残さずに食べたいです。